

今回は安政大地震と関連した三通の古文書(史料1~3)です。安政二年(一八五五)十月二日の夜、江戸を中心に大地震がありました。その被害は甚大なもので、中善寺村の領主廣戸家の屋敷も被災しました。

最初の史料は、地震のあった安政二年の十二月六日に出されたものです

下知申渡(史料1)

一、此度地震二而御住居向皆潰之上被成御類焼候二付、右御入用別段金五両二申付候へハ、被得其意厚御請上納可被致候、御下ケ金之儀者来ル辰年収納之内二而引下ケ可請依而下知申渡置候如件、

卯十二月六日

廣戸半十郎内宮内武平(印)

中善寺村

名主 善左衛門(以下略)

すなわち、廣戸半十郎の屋敷が、地震で壊滅したうえに火事にも見舞われてしまったため、その再建費用として、中善寺村

から特別に金五両を上納する内容の命令書です。

次に紹介するのは、地震後約十カ月たった翌安政三年八月の史料です。

申付之覚(史料2)

御知行所名寄帳去ル卯年地震之節損シ候付見分ケ兼候、右二付写替申付旨被仰渡候間、其御知行所二而取扱候名寄帳高反別字訳等相改紙者西之内堅紙認メ袋綴二いたし名主組頭百姓代立会之上相改候而調印いたし当月中二持参上納可被致候、其節書写候名寄帳元帳とも持参いたし為引合可申候、此段申達可候間、被得其意右認メ方落字なく停嘩ニ拵仕立差出可申此段申達候、以上

八月十七日

廣戸半十郎内宮本武平(印)

名主代

年寄 久我善左衛門殿(以下略)

これは、前年の地震のため、廣戸家を持っていた中善寺村の土地台帳である「名寄帳」が焼失してしまつたため、中善寺村にある控を元に再提出するように申し付けたものです。

最後に史料2から約二ヵ月後の十月に領主廣戸半十郎より出された書状を紹介します。

(史料3)

一筆致啓上候、追而寒冷相増候得共弥志同御無異罷在珍重致候、自分宅門之者共無異是有候、然者八月廿五日夜大風雨二而田畑大荒之由今使申越候趣者承知致、且又自分事も昨年地震之節皆潰之上類焼致、是依而難洪右之趣差入相談宜敷頼入申候、水附難洪之由申越候間、用人与相談二而差支無之様頼入申候義も、御隠居様ト者名主方頼具候様度々申越候間何分相頼申候、右申度如斯御座候以上
辰十月十二日出ス
廣戸半十郎正勝(花押)

名主 善左衛門殿(以下略)

この書状は、中善寺村から、風雨に見舞われ田畑が荒れてしまったことの報告に対する返書ですが、廣戸家が、震災の被害から一年を経過しても依然として復興できていないことが書かれています。江戸での安政大地震の被害状況については、研究がありますが、震災後の復旧についてはあまり触れられていません。そのような意味でも、この三通は、貴重なものといえましょう。

茂原市文化財審議会委員

菅根 幸裕

文芸コーナー

俳句

揚羽蝶 入れ変わり舞う 虹の色 高橋 良昌
万緑の この幸せよ 永久にあれ 武居 敬子

短歌

祖父の手で庭に落ちたる銀杏を 時女 礼子
集めて夜は酒の肴に

道すがら求めし花に添えくれし 千日紅よわが誕生花 風戸 善江

初孫に会う為行けば玄関で 足踏みふんで大歓迎を 仲村美年子

川柳

旨いものパワーも上がる血糖値 川村 亮二
禁煙の風がマッチを湿気らせる 山野井和音

いつまでも老いぬ心は好奇心 高橋由紀子
正論へモザイクかける自己過信 福田 研治

薬より妻の笑顔に病癒え 荒木庄二郎
ライスワイン杜氏無用の美味い味 稲子 勝久

猛暑日の続く茂原も暮しよい レジ待ちの列に欠伸の顔並び 大井 康章

空家増え過疎化の波に歯止め無し 小野與四法
大東京百合一輪の暑さかな 高石 久之

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
●投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※俳句、短歌、川柳の原稿送付先
〒297-8511 茂原市道表1番地 茂原市役所秘書広報課宛「文芸コーナー」と朱書きしてください。